

五大湖のひとつエリー湖沿いの工業都市クリーブランド。ここで開催中の米国トライボロジー学会年会 (Society of Tribologists and Lubrication Engineers 63rd Annual Meeting&Exhibition) の合間に一筆啓上申し上げる。筆者は12年程前にこの都市の郊外に在住していた。コンベンションセンターがあるダウンタウンに、当時は所々に廃墟のビルが放置されていた。夜になると映画に出てくるゴースタウンのように不気味で、車に乗っていても心臓によくなかった。その記憶が嘘のように今の町並みは小綺麗になった。昨夜などは酔っぱらって歩いている筆者に気の弱そうな乞食が小銭をねだりにきた程度の治安状態だ。

記憶が10年前の同学会年会にタイムスリップした。そのころは学会が参加者増加に躍起になっていたようで、各セッションの聴講者からアンケートを集めて出席者数の統計を取っていた。会期の後半は多くの会場で閑古鳥が鳴いていた。筆者は最終日に5人を相手に発表したことがある。座長と他の発表者、そして義理でつきあってくれた日本人だった。一生懸命に発表準備したのに少し悲しかった。

会期は5月中旬か下旬の日曜日から木曜日までの5日間である。初日はエデュケーションコースと参加登録のみで、テクニカルセッションは2日目以降だ。数〜十数会場に分かれてトライボロジーの各分野がカバーされ、どちらかという潤滑剤のウェイトが高い。会期中には潤滑剤

メーカーを中心に展示会が併設される。各社の工夫を凝らした景品はこのイベントの楽しみのひとつだ。ボールペン、メモ用紙、キーホルダーのようなありきたりのものから一瞬ほほえみたくなるほど機知に富んだおもちゃまで様々だ。中には参加者全員を集める会長主催の昼食会がある。ここで新旧会長のパトタッチと各種表彰が行われる。2日目夕方の方のウェルカムパーティーにも参加登録者は無料で招待される。ただしアルコールは有料で、ビールが1杯数ドルだ。ここまでは10年間全く同じである。

大きく変わったのは会場内の活気だ。以前は展示会場は混雑してもセッション会場は人が少なかった。ところが今回は最終日も満席になり、急遽広い部屋に移動したセッションもあったほどの盛況だ。学会のホームページに公開されている事前登録者リストは1200名を超えていた。参加者が1000人に満たなかった以前と比べて賑やかなのがうなずける。2006年のカルガリー大会、2007年のフィラデルフィア大会と連続して盛況だったから同学会の集客作戦は成功したのである。まさにアクティブ、その原動力は一体何物だろうか。

セッションやロビーで飛び交う情報は玉石混淆で、お世辞にも百花繚乱とはいえない。学術面に限ると情報の確度や鮮度は必ずしも高くないので、筆者のような三文学者には御利益は薄い。参加者の多くは企業の研究・開発スタッフ、または技術営業スタッフである。それぞれがこの

年会をビジネスチャンスに結びつけようとの意欲が活気につながっているようだ。様々な価値観を持った人たちがコミュニケーションする。一見脈絡のない複数の情報にある哲学に沿って整理すると、ぼんやりとした輪郭が浮かんでくる。文献調査などで周辺領域を固めると、少しずつ着想が形をなしてくる。これだけ電子メールやテレビ会議が普及しても対面コミュニケーションの重要性がここにある。学会はそのための場を提供する。広いロビースペースとコーヒーコーナーの設置には運営費がかかる。同学会では企業会員からの寄付を募ってその金額ランキングを公表している。国内の学会ではあまり見かけないけれども、神社仏閣にある献納御芳名と似ている。運営資金の集め方と使い方が実に上手だ。

金儲けには無縁の学者にもちょっとした研究のヒントにつながる情報が転がっている。特に複数の情報源から研究の方向性を探るにはいい機会である。参加者の意欲と姿勢次第で投資以上の成果が得られる学会のポテンシャルが見えてくれば、往復50時間かかる移動時間と、会員の早期割引参加登録料の500ドルはペイすると思う。

(岩手大学・南 一郎)